

氷皮

yukikago

1.人間

人間は母親の背中も分からずに育った。

母親に叱られた事もない。褒められた事もない。小学校の時、人間の住んでいたホテルにほんの少しだけ会いに来たと思えば身支度を急かされ、住所の書かれた紙と、そこまでの地図と、当面の生活費を渡された。待たせてあるタクシーに人間を詰め込むと、母親は手を軽く振ってすぐに姿を消した。人間は、今も母親の顔を思い出せない。性格も分からない。何故あそこまで急かされていたのかも分からない。何も分からないまま、人間は日本中を飛び回っていた。

人間は父親の声も分からずに育った。

人間はやはり父親の顔も思い出せない。一緒に遊んだ思い出もない。ほんのたまにだけ会いに来たと思えばただ黙って人間を見つめているだけで、人間が少し目を離れた時には姿を消している事が多かった。

人間が中学校に上がってからは携帯電話を与えられた。短い文面で健康を気遣う旨と、次の住所が書かれたメールがよく父親から届いた。その時には人間の生活費は全て銀行口座に振り込まれており、後伝える事は次の住所だけであった。

人間の両親は共働きであった。多忙で、かつ、転勤が非常に多かった。まともに安住出来る家というものがなかった。物心ついた頃から、人間はホテルや、ウィークリーマンションを転々としていた。時には1時間でウィークリーマンションを引き払った事もある。

当然、友達が出来ない。一番長く在校出来たのは小学校4年生の半年で、後は在学期間の規則性もなく様々な学校を転々としていた。

人間は両親の仕事について、特に疑問を感じなかった。感じるだけの素質がなかった。人間は学校でも、仮の住まいでも、寡黙であった。寡黙以外に、人との接し方が分からずに育った。人間には人らしい感性が酷く欠落していたのである。

そうして、両親が仕事で死んだと告げられた時も、やはり寡黙でいる事しか出来なかった。高校生になったばかりの時であった。

遺体はない、と同僚と自称する人物は語った。人間は、両親の死んだ理由は聞けなかった。極秘であるとして、自称同僚は答えなかったのである。人間は、それ以上言及する事はなかった。言及しない方がいい、そういう顔を、自称同僚はしていたからである。

人間の手元には両親の顔写真すら残らなかった。そして、何より、両親の死に対して、何の感慨もなかった。人間には、両親の死を悲しんだり、育児放棄を怒るだけの感情というものが、なかったのである。

人間は人との接し方も、相手の感情も分からぬままにただ過ごした。両親がなくなってからは、地方の叔父叔母が面倒を見る事になった。叔父叔母は両親とは疎遠で、始めからその人間を疎んでいた。

人間は叔父叔母の感情もよく分からなかった。分からなかったのはある意味ではとても幸せな事だろうと思う。叔父叔母は最低限の態度で接し、人間に家事の大半をやらせた。

この時の経験から、人間は家事を覚えた。また、少なからず友達も出来、高校生活は幾分かは人並になった。

人間は、よく本を読んだ。数学の本、理科の本、というようなものから、様々な物語、果ては雑誌の胡散臭い政治談義、戦隊ヒーロー大図解まで。

読んではいたが、何の感動も、感慨もなかった。美しい、楽しい、悲しい、これは違う、子供騙しだ、というような感情が、湧き上がらなかった。文章からも、何も感情が読み取れなかった。故に国語の成績は並である。

人間は、高校で出来た友達と一緒に都心の大学に進学した。一人暮らしをし、生活費と学費はアルバイトと両親の遺産で賄った。

人間は男に大変に人気のある女であった。同時に大変に不人気であった。

外見はいたって地味である。髪は腰まで長く、染めてはいない。しかし美貌はあった。化粧は最低限だが、効果的によく見せる工夫が随所に見られた。女性向け雑誌を読んだ成果である。外見は地味だがそれが良かった。女を選ぶ男の基準とはそういうものである。人間は清楚で大人しいイメージばかりが先行したが、実際のところは何も感じないただの人型であった。常に感情が表にでないので、何を考えているのか判別出来ない。にこりもしないのがまた不気味でもある。会話も全く成り立たない。話してみるととても取っつき辛い。

人気不人気の境目はここにあった。クールで無口な美人である。同時に幸が薄く、黒い長髪で無表情なため、幽霊のようにも見える。

周りの評価がどうあれ、人間は女心が無いし、男心が読めても理解しない、そもそも人間の感性があるのか怪しい。浮いた話は一切出なかった。

酒で口説こうとする男は、人間の並以上の酒の強さに負けた。

どうせ女だ、と力技に任せた卑劣漢は尽く返り討ちを受けた。人間は足や腕が細い割に、並の男よりもずっと力に勝った。この非凡で丈夫な体が、アルバイトと学生生活を両立させるための下地となっていた。

その頃の日本の情勢は、特に九州と北海道が過激を極めていた。天才科学者の人類への反乱、異星人による目的不明の破壊活動.....漫画のような出来事が立て続けに起こり、日本国領土は両者に挟み撃ちにあっていた。科学者は南から、異星人は北からである。

各国は相次いで友好の証として日本に軍を派遣し、応戦するものの、少しずつ領土は敵に奪われ、疲弊を増していた。何故日本にのみ攻め入るのか、日本に何があるというのか。各国は関心を向け、当の日本は首を傾げた。

人間はやはり、そんな不可解な出来事を何とも思っていなかった。

文章以上の情報が脳髓から湧き上がるという事はなかった。ニュースを見て戦々恐々とする人々を見て、何故あんなに顔ばかり変えているのだろうか、と不思議がった。人間は、他人の深刻そうな顔を剥いだら見えるであろう、戦場から遠い都会にいるという安心感、さらにその顔の彫り

の合間から滲み出る、その内ここにも敵は来るという恐怖、そしてその口から自然発せられる、敵が来たら俺は死ぬのか、私は消えてしまうのか、という感情を、読み取っていた。

しかし人間は、鈍感なので、読み取れても感情が伝播するには到らなかった。近くにちょうどあった鏡で自分の顔を観察してみるも、そこにあるのは普通の、人間の顔であった。目は2つ、鼻は1つ、頬は2つ、口は1つ、髪の毛多数.....文字通りの人間である。これは私ですと人間は認識した。そして、一枚皮を剥いてもそこには今と同じ面構えの顔があるだろうという事も読み取れた。世間一般と自分を、この時人間は初めて比較したのだが、どちらも同じ構成要素でありながら、皮一枚でこうも読み取れるものが違うのは、不思議な事であった。しかし不思議以上は何も感じない。己の内側の不思議を読み解くも、そこは常にカラで、一文字も読み込めるものがなかった。そうして、何故か読めない、何故だ？という不思議が追加される、不思議を読んでカラを見る.....300ほど繰り返し続けると何とも顔が鎮痛な面持ちになってきて、外の者からすると、それが敵の襲来を恐れる顔に見えたのだろう。初めて人間らしい弱さの感情が見えて、内心ほっとする友もおれば、気味悪がる通りすがりの通行人もおり、またファンクラブは人外たる意識の成長を喜んだ。いずれの検討も的外れだと言うのに。人間は、一人静かにカラを読み続けるという苦行を行なっているというのに、外の者はなんら関心を内には向けないのである。

考えて見て欲しい。ハードカバーの何も書かれていない本を、ペンで落書きするわけでもなく、何か読みたいと思って無限にめくり続けるという苦行を。文字が少しでも読める人間なら、文字を探してただひたすらにめくらなければならないという行為には圧倒的な渇きが心を占め始めると思う。思うことはただひたすらに1つ、文字が読みたいと渴望する事である。たとえ「あ」という文字でもいい、その直線の引き具合、曲線の引き具合、読み方、あいうえお順で次の文字は何か、前の文字は何か、ひっくり返すと面白いのか、斜めに見ると美しいか、フォントは何か、文字コードは何か、口にした時の感動はどうであったか.....その一文字は幼少の、まだ文字が歪んで書けない頃までにその人を導くだろう。そしてその思考の枝は幼き日々の古き良き思い出、恐怖に目を閉じた思い出、成長の喜び、初恋の味、苦く遠い戻らぬあの日を葉とし、大樹を形成するであろう。

ところが、それがないのである。「あ」は、いくらページをめくってもないのである。何も意味がない、意味がない以上の情報がない、何故私はこんな不毛な事をやり続けるのか、何故俺はたったの1つも文字が読めないのだ.....その不毛さは、地獄ではなかろうか。ページをめくる事だけに喜びを見出すのはそれはそれで地獄の麻薬にやられた廃人である。

その地獄でなお平静を保てるのが、人間の大きな特徴であった。

人間は、高校時代からの友がいた。名を白妙ペンギンという。間違いなく人である。

どういう親であろうか。子供にペンギンとつけるからにはとても意味深な理由があるのか、はたまたただの馬鹿か。

周りの心配も気にせず、白妙ペンギンは余裕を持って振舞っていた。背が低く、現代の若者らしい服装を好んでいる。

いたって普通の性格である。物事に感動する時は感動し、涙する。美味しいものは美味しそうに

食べる。悲しい時は声をあげる。可愛いものはなんでも可愛い。あまりに平均的な性格で、没個性的な面が目立った。

白妙ペンギンは人間のファンクラブの代表でもあった。人間を第一に可愛いと定義したのは他ならぬ彼女である。

人間はその可愛いという言葉もまたカラであるように見えた。白妙ペンギンの指すところは何でも可愛い of 三文字に圧縮され、情報は著しく欠如する傾向があったからである。

白妙ペンギンに誘われて、人間はケーキの美味しい喫茶店にやってきた。

白妙ペンギンはケーキでは苦味が好きであった。故にティラミスを頼張った。

人間はイチゴのミルフィーユが好きであった。故にフォークはパイ生地を切り裂いた。

人間はこの長方形に唯一感情があった。しかしケーキから読み取れるのはたったの二文字である。

赤いイチゴが太陽のように輝きを放ち、周りの生クリームはそれをさらに誇張し、それらはさくさくと乾燥したパイ生地の上でここは天国であると断言していた。一つ階層を下ると、そこには甘く濃厚な薄黄色のカスタードクリームが天使の翼を広げ、さらに下には水分を吸ってほろりとしたビスケットが、さらに下にはイチゴクリームが長方形の半分を、本物のイチゴのスライス・生クリーム連合が半分を占めたイチゴ戦争が、さらに下にはパイに続いて単体では地獄の様相を呈する苦い大人のチョコレートクリームが蠢いており、最下層にもまたパイ生地である。

目で読み取るだけでも美しい。

何よりフォークで割くパイ生地の小気味良い音、クリームの柔らかな手応え、突き立てた時の確かな、しかしつるりと刺さるその……切り分けるだけでも感じる確かな楽しさ、心に灯る色鮮やかな喜び。

人間は初めてこの長方形を食べた日の事を忘れていない。そして口にした瞬間の感情は、食べれば食べる程鮮明に深く深く、いくら舌に乗せようと際限なく求め続け、飽きる事がないのであった。人間は打ち震えた。どんなに綺麗な絵画も、万人を感動させる名著も、この長方形の前ではただの燃え尽きた灰のように無益であると感じるのである。目の前にあるイチゴのミルフィーユの方が、もっと明瞭に物を語り、いくら本を読んでも感じなかった……感動というものを、人間に与えた。人間にとって長方形は神さまであった。

かじる。まずは苦いチョコレートクリームに始まり、次にイチゴクリームのわざとらしい香りと、本物のイチゴのみずみずしく甘酸っぱい感触が口いっぱい広がった。次にカスタードクリームの穏やかな甘みと、隠し要素のペパーミントの香りが、イチゴと共に脳髓を夢だらけにしていた。苦いものを先に感じる事で、甘い物をもっと際立たせるといった戦法である。

胸の奥に残るミントの香りと、イチゴの酸味が後味を良いものとしている。チョコレートの苦味とミントがあわさって、チョコミントを食べているような気分にも浸れる。

店の天井から光が射している。これは、これは、ミルフィーユの神が降りている……！

……ここまでが脳裏に夢ある人間の縮図である。食べている姿はむしろ面倒くさいかのように見えた。目元は怠そうである。口は物が入ってるのでとりあえず動かしているかのようなのである。

が、それは普通の人でいうところの笑顔であった。白妙ペンギンはそれに気づき、その内面と外面のギャップの可愛らしさを世に知らしめるべくファンクラブを結成したのである。この気だるい姿、内面にある喜びの色、これこそが可愛いと、白妙ペンギンは思っていた。

白妙ペンギンは、一冊の雑誌を人間に見せた。

それは最新号の雑誌であるらしかった。表紙には戦場の写真が乗っている。開けても中身は同様である。戦車や、無骨な軍人の写真がいくつもあり、最後の方には、妙に原色の濃いパワードスーツを着た三人がいた。その内二人……赤と青のパワードスーツに、人間は一文字をそれぞれ読み出した。

「昔はこういうすげー戦隊ヒーローみたいなやつが、宇宙人と、南極の奴と戦ってたって。たった三人でだってさ」

「これが……なに？」

「ん……なんでもない」

白妙ペンギンは面白くない表情をすると、雑誌を今度は女性誌に切り替える。そして1ページ1ページをめくっては可愛い可愛いと人間に言い放つのである。

人間は雑誌から可愛いという感覚は読み取れなかった。また白妙ペンギンも、人間が何か返すのを期待してはいなかった。ただ人間がイチゴのミルフィーユを模した小物を見ると気怠い雰囲気を出すと面白がるのが、白妙ペンギンの性分であった。

二人は帰り道の河原を歩いた。

河原は夕日に照らされて、目を細めないと凝視出来ない。橋の影が長く長く伸びている。街全体が、オレンジ色と影の二極に染まっている。

白妙ペンギンは大学のサークルの話はずっとしていた。テニスサークルの愛憎の入り混じった恋愛話が主な事柄を締めており、AくんがBさんと別れてCさんと付き合うようになった、Bさんが嫉妬して三人が集まると非常に空気が重くなる、という事だった。

空気が重くなるというのは、空気より重い気体が部屋を占拠しているという事だろうか。二酸化炭素あたりだろうか。ガスかもしれない。何故窓を開けないんだろう……そんな見当違いを人間が考えていると、川からあがってくる妙な人影がいる事に気づいた。

人の形をкаろうじてしている。橋の影が霞む程に黒みを帯び、光を吸収するかのようにはツヤがなかった。腕らしきものは前足となっており、五指はあるもののあまり繊細な動作は出来なさそうである。

背骨の延長線上のお尻の方にはサソリのような巨大な尻尾が反り返っており、前方には目のないワニのような口だけがあった。

人間は首を傾げた。あれは地球の生き物ではない。そして、本来なら北海道にいるはずのものだからである。人間は異星人……どう見ても人ではない、異星怪獣から何かを読み取ろうとした。それはアヒルのような、マガモのような、わけの分からないものであった。その口にある、黒く見えづらい細かな歯は、糸鋸のように物を擦り切る危険なものと読めるが、人間はそれを恐怖に

変えて逃げるという感情がなかった。

怪獣は堤防までのしと歩き、手近の学生まで近づいた。その口を限界まで大きく開けると、学生の背丈を超える程の高さがある。

口が閉じる。悪魔を見たかのような絶叫が鼓膜にこびりつき、一撃で命が失われ、咀嚼するたびに異臭が漂い、下手な飲み込みで吹き出す血の赤が目眩しかった。血と、人の片足と、臓物の幾つかを地面に落とし、怪獣は次の獲物を探している。その足の運びから、食べ物の足りていない飢餓が読み取れた。味を感じる舌もなく、美味しさを語る喉もなく、怪獣はただ獲物を探している。不器用に足を動かしながら、怪獣の頭は人間を向いた。対象を人間に見定めたのだ。

「ここまで宇宙怪獣が来てる……」

白妙ペンギンは人間の前に一步出る。

「下がって、四季」

珍しく真剣な白妙ペンギンに、人間はまたカラを数えた。

「きつとなんとかなる、大丈夫だ、訓練通りに……」

白妙ペンギンは左手を斜め下に、右手を左上に掲げている。

右手には何かの箱を持ち、いつの間にか腰には、角ばって機械的な赤いベルトがある。彼女らしからぬ、直線的で無骨なベルトである。きつと平時の白妙ペンギンなら、このベルトは可愛くないと一蹴していたであろう。

白妙ペンギンは全身が震えていた。そこから読み取れるのは、怪獣からの脅威である。怪獣の口や地面に散らばる血に、己が変換されてしまうという恐怖である。ここで死ぬという事は、遺体として一部しか残らないという、死人としてもっとも残忍な結末である。

のしり、と重い一步を怪獣が踏み出すたびに、白妙ペンギンは体を強ばらせた。顔から冷や汗が滴り落ちる。手はもうこれ以上動かせない。

のしり、ともう一步、怪獣は一步を踏み出す。ワニの口元が少し歪み、その姿はまるで笑っているかのようであった。

白妙ペンギンにはそれが限界だった。足元から崩れ落ち、怪獣を見据えた目を地面に落とした。もう見れない、逃げようにも足が動かない……人間は、そのような感情を読み取っていた。

「白妙、あれは私達を食べようとしている」

「無理よ……なにあれ……」

聞こえていないようである。

人間は白妙ペンギンの持っていた、彼女らしからぬ物が地面に投げ出されている事に気づいた。随分と前にどこかで読んだものだ。分厚いカードのようなもので、側面にスイッチのある機械である。これはいつ読んだか……。

怪獣がまた一步を踏み出す。白妙ペンギンはこの一步にもはや反応を示さなかった。ただ何もせず、両手を頬にあて、青い顔をしている。

人間はカードを拾い、側面のスイッチを押した。すると、白妙ペンギンがいつの間にかつけていた機械的なベルトが、自分の体に突然装備された。ずしりと重みがある。これをどう使うかも、人間は前に読んでいた。音声認識と、ベルトとの物理的接触が必要なのだ、と。

「変身」

ベルトのバックルにある差し込み口にカードを入れた。

そうして、自身の体が何かに包まれた。なんという一体感だろう、これはなんという感情だろうか……ミルフィーユを食べた時のものでも、白妙ペンギンに感じるものでもない。胸の奥底から熱く湧き出て、体中を駆け巡り細胞の一つ一つを支配していく激動。同時に、頭は隅々まで透明になり、明瞭に敵を見据える冷静さ。何を成すべきで、そのためにどうすべきかを体と心の両方が知っている。

きっと体は特殊な……あの雑誌の最後にあった、戦隊ヒーローのようなもので包まれているのだろう。となると、私がやる事は、目の前の敵を……怪獣を、粉碎するということだ。

人間は飛んだ。人の脚力では到底出せない高さまでジャンプし、怪獣の弱点であろう背骨を冷徹に見抜き、腕に渾身の力を込め、一撃を与えた。

人間と白妙ペンギンは、促されるままに地下鉄に寄せられた。

白妙ペンギンは頬に血の気が戻っていた。人間は特に何も思うところはない。ただ、あの何かをまとった時の感触が、体に残り続けていた。

変身が解けてすぐ、よく分からない一団……格好は警察や消防の者である……に連れられて、人間と白妙ペンギンは丸ノ内線のようなものに強制的に寄せられた。怪獣の残骸は、この一団がどうにかするのだと、白妙ペンギンは細々とつぶやいた。

人間は周りを観察する。いかにも丸ノ内線であるが、中吊り広告は一つも見当たらない。また、人がこの車両以外にいる気配がない。椅子が通常の丸ノ内線よりふかふかしている、床にこすり傷や染みがない……内装は丸ノ内線だが、車内が使われていない事が容易に推理出来る。

行き先は分からない。車内の電光掲示板の表記は消えていた。

なんだか、人も物も少ない……人間は通常の丸ノ内線と、この偽丸ノ内線を比較して、そう思った。

人間は白妙ペンギンを見た。白妙ペンギンは使い込まれていない床に目線を落とし、じっとしていた。その体は恐怖が抜けきれていない。視線の先には、白妙ペンギンの猛省が見えている。

「白妙、元気？」

「う……わ、私は元気よ！ し、し、し、四季こそ、よくあんな怪獣に怯えず戦えたものね！ 私には……無理だったし。やっぱりご両親の血筋でしょ、それ」

「白妙は私の父と母を知っている？」

「そりゃ、もちろん。だって、四季のご両親は立派なヒーローだったじゃない。四季だって憧れたでしょ」

「父と母はヒーロー……あの雑誌の赤と青のヒーロー？」

「え……そうよ。四季、もしかして、知らなかった？」

「私は両親が何をしていたか、知らない」

「日本の誇るスーパーヒーローなのに！」

「知らないのだから仕方ない」

白妙ペンギンは信じられない、と言った顔をした。

人間が雑誌のヒーローから読み取ったもの。それは「父」と「母」であった。

人間と白妙ペンギンは、無人のホームに降りた。そこからエレベーターをつかい、更に下へと進む。

「ここはどこ」

「名前はないわ。秘密組織だから、名前からまず消しとくんだってさ」

「秘密組織。白妙もその仲間？」

「そうよ、あんたが舟歌夫婦の子供だって知ってて近づいた。初めはね」

「今は」

「.....友達だと思ってる」

若干の躊躇いがそこには読み取れた。任務で近づいているだけで、友達と思ってなくても友達だと答えるような、冷酷な人間に見られてはいないか。また、現在も自分は任務中であるという事実もあり、それを元に嫌われるのなら仕方ない、という諦め。そして、それでもやはり四季には嫌われたくないという考え。色々な思いが同時に両立している事に、白妙ペンギンには困惑と抵抗があった。

人間は、何も思う事はなかった。白妙ペンギンの躊躇いは、人間にとっては杞憂に思われた。仮に嫌ったとしても、秘密組織というものはきっとまた、白妙ペンギンでない誰かを周囲に置くかもしれない。そう考えると、人間は、それなら白妙ペンギンが良いと思った。白妙ペンギンは、人間が生まれてから一番長い、高校からの付き合いのある友達である。白妙ペンギンの正体はどうあれ、人間の心は決まっているのであった。

「白妙は気にしすぎ」

「.....ごめん。今はそのそっけなさ、嬉しい」

白妙ペンギンは、俯きながら、少し安堵した表情を浮かべた。

エレベーターをおり、白妙ペンギンの誘導に従って人間は歩いた。

妙な廊下であった。まるで小学校のようである。床の中央には線が引いてあり、歩行者は左側を歩くようにという注意書きがなされている。地下だというのに窓がある。その窓からは校舎から一段下がった位置に運動場があり、その脇には鉄棒やアスレチックが数点あった。空は夕日に染まっており、低い雲の間から羽ばたく鳥の影が見える。

まるで地上のようだ。しかし、何故地下に地上があるのだろうか。人間は不思議に思った。これは夢なのだろうか、と考えていると、白妙ペンギンは口を開いた。

「始めてここに来た人はみんな首を捻るよ。地下にこんな場所があるなんておかしいものね。でも、あの空も、太陽も、間違いなく本物。ここでロケットを飛ばせば、間違いなく宇宙へいける。ここは、地下だけど地下じゃない、特別な空間.....らしいわ」

「白妙もよく分かってない？」

「そ。ま、分からなくてもそんなもんなんだって思っていれば、いいんじゃない？ 不思議空間なん

だし」

人間は、この光景が、酷く情報が欠如している事が読み取れた。しかし、何故そうなのかまでは分からなかった。

白妙ペンギンと人間は、校長室へやってきた。校長室は誰もおらず、しんとしている。どこかの大会で優勝したかのようなトロフィーが壁際の棚に飾られている。部屋の中央には応接用の革張りの黒い椅子があり、二人用の椅子が二つ、一人用の椅子が一つ、テーブルの周囲を取り巻くように配置されている。

白妙ペンギンは勝手に応接椅子に腰掛けた。行儀良さのかけらもなく、どしんと音を立てる。人間はテーブルを挟んだ椅子に腰掛け、白妙ペンギンを真正面から見据える位置を陣取った。

「白妙」

「分かってる。あの化け物が何か、四季が変身したものが何か。ここはなんなのか。私達が何者なのか。それが聞きたいのでしょう」

人間は頷いた。

「私に分かる事だけ話すわ。あの化け物については……もちろん分かっているわね。北海道にいる異星人よ。彼らは時々、東京に偵察部隊を送るのが習慣らしいわ。何故偵察部隊を隠密裏に出すのか……その目的は不明。分かっている事は、手近な生物を食べて活動するって事だけ」

白妙ペンギンはそこで区切った。先程の血や肉の断片を思い出したのであろう、苦味と怒りの混じった表情をする。

「……人類の脅威って事ね。ここは、その宇宙怪獣や、南極帝国と戦う為の私設組織の本部なの。東京の地下にある不思議空間」

私設の組織と白妙ペンギンは言っている。おかしいと人間は思う。あんなに強い……兵器のようなパワードスーツを保有出来る組織なら、九州や北海道で活躍出来るはずなのだ。それが何故か、平和な東京の地下でぼんやりとしているのだろうか。

「次に、あのスーツ……四季が変身したやつね」

白妙ペンギンは、分厚いカードを机に置いた。

「これが変身に必要なもの。四季がやったように、脇にあるボタンを押すとベルトが勝手に出てくるの。で、音声入力しながらベルトにくっつける」

わざわざ音声入力する必要ないのに、と白妙ペンギンはこぼす。

「変身にはいくつか段階があるんだけど……四季が変身したのは一番身軽なタイプね。腕一つで敵を倒すファイターモード」

ファイターモード。それは、白妙ペンギンの見せたあの雑誌のような形態の事なのだろう。人間は、あれに変身し、異星怪獣を倒したのだ。人間はあの時の自身の激情を思い出した。あのような感情は、人生で一度も体感した事のないものだった。

「……他にも色々出来るらしいんだけど、まだ訓練中だから全てを知ってるわけじゃないわ…

…ま、なんにせよ、これを開発したのが、私の所属する組織なの。後で開発室にも案内するわ」

「秘密組織がそんなに情報を明かしているの？」

「よくはない。でも、四季は舟歌夫婦の子供で、あのスーツを使って敵を倒してるのよ。今更部外者扱い出来ないじゃない」

「その通りだ」

不意に、一人用の椅子から声がした。人間と白妙ペンギンは同時に声の主を見る。

「司令、いらしたんですか」

「ああ、ちょっと前に戻ってきた」

司令と呼ばれた女性は、四十半ばくらいであった。豊麗線がくっきりとしているものの、歳には似合わぬ活力というものが湧き出ている人物だった。美しい老い方とはこのような事なのだろう、という断言が出来る程、その顔には歳を重ねてこそその美貌があった。

しかし、その活力に反して気配は微弱である。一度視線をそらせば、その活力も同時に消えてしまうような、酷く安定性に欠ける感觸の人物である。

人間は、指令から一文字を読み取った。

「舟歌さんの娘さんだね？」

指令は人間に問いかけた。人間の代わりに白妙ペンギンが答える。

「そうです」

「お父上に似て寡黙だ。それでいてお母上のように情熱的なようだ。君の戦闘記録は見せて貰った。流石は舟歌夫婦の子供だな。鷹の子はやはり鷹という事か」

「両親をご存知なのですか」

「もちろん。ここにいる人間は全員、舟歌夫婦の逸話を知っているよ。あの夫婦は我々にとっても、世間にとっても、ヒーローと呼ぶに相応しい人だった」

指令は目を閉じ、少しの間、何かを懐かしむようにしていた。

白妙ペンギンも、穏やかな顔つきをしている。

人間は、よく分からなかった。皆は良い人だったという。しかし人間から見た両親というのは、ただ仕事に追われている人、でしかない。それ以上の感情はない。貶める程でもない。ここの人達とは決定的に印象が違う。これだけは、なんとなく分かった。

「父と母は何をしていたのですか」

「何って……君はお父上とお母上の功績を何だと思ってるんだ」

「父も母も、仕事に追われていた。それしか私には分からないのです。両親は、私より仕事に熱心でしたから」

人間は事実をありのままに語ったつもりであった。

司令は、大きく目を開いた後、そうか、それもそうだろうな、とつぶやいた。

「君のご両親は、そうだな、分かりやすくいえば正義の味方だった。君のお父上は、ブルースーツを使うチームの頭脳だった。寡黙だったが、大抵の場合、彼の戦闘時の判断は正しかった。彼の奇策には何度も反対したものだが、結局は彼が正しかったものさ。

君のお母上はレッドスーツを使い敵を倒す主戦力だった。スーツの力を、生身の人間であれ程引き出せた人物は他にはいない。お父上の頭脳と、お母上の肉体が、チームの要だったのだよ」

「司令は何をしていたのですか？」

人間は問う。人間は司令に「黄」という文字を読み取ったのである。それは、あの三色の戦隊の一人である事を意味する。

「私はサポート役さ。攻撃の時はお母上と共に駆け、防御の時はお父上を守る盾となっていた。私のスーツは適性を選ばずに使えるような調整がなされていてね。君のお父上、お母上には性能でも技量でも到底及ばなかったのだよ。でもそれでも良いと思った。舟歌夫婦をサポート出来るというのは、我々の中では誉れとされていたからな」

白妙ペンギンを人間は見る。そこには、まるで戦隊ヒーローに憧れるかのような少年の顔をした白妙ペンギンがいた。否。白妙ペンギンは、元からそのような志のある人間である。

「君は……ご両親の後を継ぐ気はないかね？」

司令は人間をまっすぐに見つめた。背を正し、引き締まった面持ちをしている。

「強制はしない。しかし、君の戦闘力、判断の的確さは神の領域にある。冷静な判断力、敵を恐れぬ勇気、身のこなしの軽さ……これらはそう簡単に会得できないものだ。是非、我が組織に、その力を貸して欲しい」

「ね、四季、私と一緒に戦いましょう。私は役不足かもしれないけど……でもサポートなら出来るわ」

人間は考えた。ここで戦う事を否定した時の事を考えた。常時勧誘されるだろうか。川辺にいた人間のように、肉片になる人間が増えるだろうか。白妙。白妙が食べられてしまうのは嫌だ。名前も知らない他人を、人間はどうとも思わなかった。ただ、白妙ペンギンが食べられる、目の前からいなくなるというのは、どうしても避けたかった。

「……一つ、聞いていいですか」

「なんだね」

「なんの為に戦うのですか？」

「……人を守る事に、理由があるか？」

人間は、その口から発せられた「嘘」を嗅ぎ取った。

「……分かりました。私を使って下さい」

白妙ペンギンは声をあげて喜んだ。

人間は、嘘をつく意義を考えていた。

人間は開発室に案内された。そこは部屋自身は白くあろうと努力しているものであった。壁は塗られたように白く、少しの汚れ程度は簡単に洗い流せるようなコーティングがなされている。部屋の照明はその色を強調すべくただ無色であった。

部屋には三つの人型が、一列に立っていた。鉄で覆われた、ロボットのようなものである。

「一番前にあるのが四季が変身したレッドスーツよ。レッドスーツは、四季のお母さんが使っていたものを改良したもの」

「赤くないのは何故？」

「これはアーマードモード。この装甲を外せば、中は赤いわけ。他の二つのスーツも同じよ」

人間はレッドスーツに触れた。鉄特有の冷たさ、少し触ると体温が移る様を、人間は感じた。

「四季はお母さん似なんだろうね。レッドスーツは、並の人間には使えないの。私も一度使った事があるけど.....変身した直後に意識飛んじやったよ」

母に似ている.....。

人間には母似の実感というものがなかった。人間が母と接したのは一体何分であろうか。その間に話した事はなんであったか。人間はそれを思い出せなかった。それは父に対しても同様であった。冷静な人物だった、「らしい」。人間は、父の人格も知らぬままに育った。全ては、白妙ペンギンと司令から伝え聞いただけのものである。

「白妙は別のものを使う？」

「私はこっちのホワイトスーツを使うわ。四季のとはまた違うものね」

「白妙は、私の父と母のようになりたい？」

「もちろん。だってかっこいいもの」

白妙ペンギンの目には純粹さが宿っていた。

「白妙。私は、白妙が死ぬのは嫌だ」

「突然なに？ 戦いで死ぬって事？」

「白妙が死んだら、私は.....悲しい」

人間はこの時口にした「悲しい」という言葉から、自己の感情が動くのを感じた。人とは概ねそのようなものである。言葉にして始めて、人はそれを自覚させられるのである。

人間にとって友と呼べるのは白妙ペンギンだけであった。人間にとってそれは、とても大切な人という事であった。

「やめて頂戴。私を勝手に殺さないでよ」

「私は戦う理由はない。でも、白妙が危険になるのは嫌だ。だから一緒に戦う」

「四季.....ありがと。改めてよろしくね。四季がいれば、きっと侵略者なんか簡単に倒せちゃうよ！」

人間は両手を上げて喜ぶ白妙ペンギンが、見た目と外見のバランスが酷く歪であるように見えた。

2.恐怖

白妙ペンギンは恐れていた。いや、恐れ続けていた。

自身が肉塊になってしまうという恐怖。耳の奥底に残り続ける、宇宙怪獣に食われた人の叫び。その叫びがいつまでも頭の中を這いずりまわり、時に悪夢として再生された。暗い夜の部屋に、苦しい唸り声が響いた。

白妙ペンギンは耐えた。恐れを振り切らない限り奴らは倒せないと自分に言い聞かせた。が……白妙ペンギンの心は何時までも変化しなかった。恐怖が消えない。何をやっても脳髄の裏側ではあの光景が再生され続けている。私もああなるのか。いや、私が強ければああはならない。しかし、自分が強い事と敵に食われる事、それにはあまり関係性がないようにも思われる。敵が大多数で攻めて来たらどうする？ 私が強くなる前に敵に襲われたらどうする？ そもそも川辺の敵はただの偵察隊ではないか。本当の攻撃部隊ならもっと強靱凶悪なのではないか。私が偵察部隊よりは強く、攻撃部隊より弱かったら、その時はどうすればいい？

白妙ペンギンは目を閉じた。耳を塞いだ。口を硬く結んだ。しかし、いくら外部からの入力を防ごうと、意味はなかった。その恐れは、自身の内側にあるのだ。内側に閉じこもれば閉じこもるほど、その恐怖に白妙ペンギンの目は釘付けになり、耳は狂気を聞き、口は金切り声の悲鳴を上げるのであった。

その恐怖は、誰にも見えなかった。また白妙ペンギン自身、隠そうとした。恐怖に打ち勝ってこそ真のヒーローだ、と信じきっていたのである。

地上にいる時、白妙ペンギンはどこにでもいる大学生の一であった。

地下にいる時、白妙ペンギンは正義を語る熱い女であった。

そしてどちらの時においても、頭蓋の中には黒く蠢くものがあつた。

人間は、白妙ペンギン持つ三面の性格が全て読めていた。

しかし、人間には恐怖を感じる心というものが欠けていた。人間には、白妙ペンギンの後頭部を占拠する苦悩も、凄惨な死を避けようと努力する心も、理解出来なかったのである。

人間と白妙ペンギンは、敵襲の連絡を受けた。複数の宇宙怪獣は数人の一般人を捕食後、地下へと移動したとの知らせだった。

その時の白妙ペンギンは、新宿のファストフード店の二階の窓際で、通行人が行き来する道路を見ていた。

連絡を受けた白妙ペンギンは、全身から汗が吹き出すのを感じた。頬を指で拭くと、汗がべっとりと貼りついてくる。みぞおちの奥からざらざらとした気持ち悪さが生成され、吐きそうになる体を懸命に抑え込もうとした。首筋から感じる悪寒が、全身に伝播し、体中が震えていく。白妙ペンギンは周りの客を半ば突き飛ばす形でトイレへと駆け込んだ。そして、耐えきれなくなったものを吐き出した。胃の中身が空になっても、白妙ペンギンは吐く事を止められなかった。胃液をひたすらに吐き出した。

原型を多少残したハンバーガーが便器の水の上で浮いているのを、白妙ペンギンは見た。その無様さに、少しばかり正気を取り戻す。汗が乾き白妙ペンギンは悪寒とは違う、体温が奪われた事による寒気に震えた。

私は何をやっているのだろうか。敵を、日本を脅かす敵をいずれ一匹残らず駆逐するのが、私の正義ではなかったのか。それがなんてザマだろう。一匹の宇宙怪獣すらに怯え戸惑うような奴が、出来もしない夢を掲げるなど、笑止千万ではなからうか。

白妙ペンギンは、自傷気味に笑った。そうして、よろよろとトイレから這い上がり、人間や組織の人間と合流するために、連絡を入れた。

人間は恐怖は感じないものの、ただの木偶の坊というわけではなかった。合流した白妙ペンギンから漂う、いつもと違う雰囲気を読み取った。

汗が臭う事を嫌って常に発汗対策を怠らない白妙、口臭を気にしてミントタブレットなどの香りの良いものを愛食する白妙。そのような小さな身だしなみというものが、今日の白妙にはなかった。

「白妙。無理はよくない」

「私は無理なんてしていないわ。ちょっと興奮し過ぎただけよ」

人間と白妙ペンギンは地下へ潜った。宇宙怪獣は、地下鉄の通路を進んでいるとの事だった。全ての路線は人身事故として運休止、駅構内から人が閉め出される措置が取られた。人間と白妙ペンギンは、誰もいない駅を見上げる形で通り過ぎた。二人は線路の上を走っているのである。

「これ、変な乗り物。浮いてる」

「ホバーバイクよ。地下鉄の線路なんかを走る時は、タイヤよりも浮いて走れるこれの方が安全だし、何より早いからね」

バイクはエンジン音もなく静かに前へと進む。地下は、風を切る音、天井から落ちる水滴が落ちる音、時より地を這うネズミのがさりとした音ばかりである。ネズミが音を出すたびに、白妙ペンギンは警戒した。人間は、特に気にはとめなかった。

「このまま適当に進んでも見つからないと思うが」

「組織の他の隊も搜索してるわ。見つけ次第連絡が入るでしょうね」

「白妙、そこを右に」

「え？」

「なんとなく居場所が分かる」

「嘘でしょ、いくら四季でも」

「白妙は分からない？ マガモみたいなの」

「マガモって何よ。鳥？」

「アヒルもなんだけど、何を考えてるのかよく分からない。だから目立つ」

「わけわかんないんだけど。まあいいか、あてがあるわけでもないし」

白妙ペンギンは、人間の指示に従って動いた。全く根拠のない人間の第六感を、白妙ペンギンは鵜呑みにしてみたのである。そうすると、何故かネズミの足音も気にならなくなった。人間が嘘

や冗談を言わないというのを、白妙ペンギンはよく分かっていた。無根拠な事も言わないのも承知済みだ。今は人間の第六感に従う方が、白妙ペンギンには正しいと思った。

でも……マガモってなんだろ。

公園の池でのんきに泳いでいる、緑っぽい印象のある鳥。確かに何を考えてるのか分からない。カラスは狡猾にゴミ袋から餌を漁るし、鳩は常に地面をつついて何かを食べ続けている。でもマガモにはそういう必死さのようなものは、なさそうに見える。しかし、そういう印象の話を人間がしているわけではないのだろうと白妙ペンギンは思った。白妙ペンギンは人間と接して数年になるが、未だに理解出来ない点が多かった。それは同時に、人間の魅力的な一面でもあった。

「白妙、止まって」

人間の言葉に我にかえった白妙ペンギンは、急いでブレーキをかけた。ヘッドライトの光が照らす先には、何も見当たらなかった。白妙ペンギンは周囲を見渡すも、そこには薄暗い壁があるだけだ。

「何もいないじゃない」

「いる。というか、入ってしまった」

「？何を言って……」

白妙ペンギンが言い終わる前に、壁が溶けたように蠢いた。蠢いた壁は前方と後方の道を塞ぎ、人間と白妙ペンギンを閉じ込めてしまった。

「どうやらこの宇宙怪獣は、待ち構えて相手を閉じ込める奴らしい。……まるで胃袋のよう」

「私達を溶かして食べるって事？ 冗談！ そんな胃袋、穴だらけにしてやるわ！」

カードのスイッチを押し、コール！ と白妙ペンギンは叫んだ。

宇宙怪獣の胃袋は積極的に二人を食い殺そうとした。壁から細長い触手が生えてきては、人間と白妙ペンギンをめがけて一直線に突撃してくる。その触手の先端は硬度のあるトゲで、弾丸のように素早かった。常人が当たれば即、体を穴だらけにされてしまうだろう。

変身した人間と白妙ペンギンは、一番身軽なファイターモードでこの触手に対抗した。触手を腰から抜いた細身の剣で切り払い、壁を銃で撃ち抜いた。人間が反撃するたびに、宇宙怪獣は小さく悶絶した声をあげる。

変身した二人には、銃弾のような早さの触手を見抜けるだけの能力が備わっていた。しかし、いくら身軽に交わし、切り払い、壁を攻撃しても、一向に敵が倒れる気配がなかった。

「めんどくさいわねー！」

白妙ペンギンは怒鳴った。

「白妙、アーマードになる」

人間はベルトのバックルに軽く手を当てた。すると、その体は一瞬のうちにアーマードモードへと姿を変えた。触手はアーマードモードの人間に迫るも、その厚い装甲を貫けず、容易く弾かれた。

「どうするつもり？」

「こちら辺を軽く焼く。白妙は私の背中に」

白妙ペンギンは素早く人間の後ろへ移動する。

人間は、右脇にある銃口を前に出すと、先端に火を灯した。アーマードモードには、火炎放射器がついているのである。宇宙怪獣とて所詮は生き物であり、火には弱いのだ。

火に気づいた宇宙怪獣が、人間の行動を止めようと全力で触手を向ける。それよりも早く、人間は火を放った。壁に筆で色をつけていくように、人間は丹念に燃やしていった。空中を舞っていた触手は本体を離れて灰となった。その本体もまた、燃えて灰へと置換されていく。ぎい、と、おぞましい悲鳴が地下にこだまし、宇宙怪獣は絶命した。

「白妙、大丈夫？」

「おかげさまで」

「今変身を解くと酸欠になる。少し離れてから」

「そうね。って、あーあ。バイクボロボロ。あの宇宙怪獣許しがたいわね」

白妙ペンギンはため息をついた。しかし同時に深い安堵があった。

なんだ、宇宙怪獣なんてどうって事はないんだ。変身さえ出来れば、こんな奴ら簡単に倒せるんだ。あれは最初だから失敗したんだ。そうに違いない。

白妙ペンギンは、脚部のみをアーマードモードにした。これもホバーバイク同様、地面から浮きつつ移動ができる仕組みになっている。

「行きましょ、四季。まだ何匹かいるはずよ。……その、マガモ的なやつって、感じる？」

「遠くに薄く感じる。そちらにいてみよう」

白妙ペンギンと人間は、再び探索を開始した。

白妙ペンギンが覚えているのはここまでだった。気づいた時には変身は解け、地上におり、人間に羽交い締めにされていた。

白妙ペンギンは、錯乱し、暴れていた自分に気づいた。宙に振り上げていた拳を下げ、暴れる意思がない事を示した。

人間は白妙ペンギンを離した。白妙ペンギンは、荒くなった息を整えるために、軽く深呼吸をした。汗が顎から滴り落ちるのを感じた。激しく酸素を求める割に、体はとても冷たい。白妙ペンギンは空を見上げた。どうやらビルとビルの間にいるらしく、見える空は狭い。しかし、青い空と白い雲が、穏やかに流れている。遠くでトラックが走る時の騒音らしきものが聞こえる。クラクションの音もする。周りには人気はなく、人間と、数人の組織の人間がいるばかりだ。

白妙ペンギンは、組織の一人の服を見る。スーツの開発過程で生まれた簡易的な装備で、スーツには劣るものの、万人に使えるように調整された高性能な防護服である。それらは黒を基調としているが、その防護服の胸には、血に由来する別の黒が、はっきりと分かる形についていた。

死んだ。宇宙怪獣に殺された人の血だ。白妙ペンギンは、再び暴れ出したくなる体を抑えた。泣き叫びたくなる恐怖に蓋をした。自分が至らない事を誰よりも怒り、そして恥じた。

「白妙。敵は倒した。今は、休もう」

人間は、白妙ペンギンの背中を押した。白妙ペンギンは、ただ、人間に促されるままに、歩くしかなかった。

人間は司令へ以下のような報告をした。

宇宙怪獣一体を白妙ペンギンと共に撃破。ここまで、白妙ペンギンは平静だった。

二体目、三体目の宇宙怪獣を同時に発見。その時、白妙ペンギンは、宇宙怪獣捜索中の組織の一人が食い殺されているのを目撃し、錯乱。一体は人間が撃破し、もう一体は取り乱した白妙ペンギンの銃乱射により撃破。その際、何人かの組織員が流れ弾に当たり負傷。ただし、命に関わる程の怪我には到らなかった。

司令は、その報告を黙って聞いていた。

「……彼女には、まだ戦闘は早過ぎたのだろうか」

司令はつぶやいた。

「スーツを扱えるのは、素質のある人間だけだと聞いていますが」

「そうだ。白妙は我が組織の中でスーツとの親和性がかなり高い。君と彼女以外でスーツを扱える人間はいない。しかし……あれでは、戦えない」

「そんな事はありません。白妙は、少なくとも、壁の宇宙怪獣を対処していました」

「我々は組織的に行動する。いくら君と彼女が主力であっても……いや、主力だからこそ、あれでは駄目なのだ。君達は私達の象徴なのだよ。君達が堂々と戦う姿こそ、他の戦闘員の士気を高めるのだ。君達ヒーローがあつての組織なのだよ」

「では、白妙は今後、スーツには乗せないと？」

「その可能性も考慮しないとイケない。もちろん、教育し直すという手も検討する。だが……」

司令はそれ以上何も答えなかった。

白妙ペンギンは組織の本拠地である学校の、一階の教室で休んでいた。再度暴れ出さないよう、軟禁状態であった。

しかし、警備はそこまで厳重というわけでもなかった。人間は、廊下にいる警備員を半分無視する形で白妙ペンギンのいる教室に入った。外は夕日であった。白妙ペンギンは教室の後ろの角にある、窓際の席に座り、外の風景をぼんやりと眺めていた。人間に背中を見せ、頬杖をついている。

慰めるための良い言葉を、人間は思いつくことが出来なかった。

「白妙、元気？」

「……四季は？」

「私はなんともない」

「そうね。おかしいのは、私ね」

白妙ペンギンは窓から目を話さない。人間は白妙ペンギンの背中から、自身への失望を読み取っていた。

今日はちゃんとやれるはずだと思っていたのに。宇宙怪獣に立ち向かうだけの勇気が私にはあるのに。

白妙ペンギンは食い殺されるという行為を恐れている。自身、他人に関わらず、四散した肉、放

置される骨、臭気を放つ血……それらを見る事が、出来ないのだ。

「白妙は正しい」

「正しくなんてないよ。おかしいわ。スーツを使う人物が、あんなでは駄目なのよ」

「司令もそう言った」

「当たり前じゃない」

人間は、当たり前について考えた。人間は、恐怖が分からない。しかし、恐怖する感情を持つ人というものが、この世の大多数を占めているのは分かる。新宿の人ごみを歩けば、程度は異なれど、恐れを内に隠している人が簡単に見つかる。ああ、俺はまた取引先に怒られに行くのか。ああ、私はまた世間体を気にして友達の中にいないといけないのか。顔にその思いを出さず、人々は雑多に紛れている。

恐怖する事の方が、当たり前なのではなかろうか、と人間は思った。しかし、この地下での当たり前は違った。恐怖してはいけない。多数が混乱のうちに逃げ出す場において、冷静に物事を見据え、敵を打倒するだけの能力がなければならない。

人間はさらに考えた。怯えつつも戦おうとする白妙のような人物は、どうすれば良いのだろうか。敵を倒す能力がありながら、たった一つの感情の揺らめきで無力になる。感情を殺せばいいのだろうか。そんな白妙は毛先程も想像し難く、またそうなって欲しくはない。笑う時は笑い、泣く時は泣くのが白妙だ。それが白妙ペンギンの当たり前だ。

「白妙、一つ聞いても？」

「何？」

「白妙は、戦うのを諦める？」

「私、食べられた人の残骸なんて見れない。それで毎度あぁなって迷惑をかけるなら、降りた方がみんなの為になる」

「そうじゃない。もしそういう弱点がなくなったら、白妙は戦うの？ 戦う意思があるの？」

「もちろん。私はヒーローになりたいのだから」

分かった、と人間はつぶやいた。人間は白妙ペンギンの前にある席につき、二人で夜に染まり始めた夕日を眺めていた。

昼下がりの午後、人間と白妙ペンギンは新宿御苑の改札を抜けた。普段近寄らない、わざわざ入場料を取るような公園に足を踏み入れたのは、白妙ペンギンがマガモ見学をしたいと言い出したからである。

「マガモの生態と気配を見抜けるようになれば、戦闘時に役に立つに違いない」

というのが白妙ペンギンの自論である。

人間は、歩きながらマガモの気配を読み取ろうとした。しかし、マガモの気配は全くない。あるのはざらざらと葉を揺らす木々の音ばかりである。

宇宙怪獣は遠くからでもマガモの気配を出す事が出来る。本物のマガモは視覚的に捉えないと、あの何を考えているのか分からない、不思議な雰囲気を読めない。

白妙ペンギンは一直線に池を目指した。人間もそれに従った。木々の集中している小道を抜け

ると、そこには池がある。対岸には涼しげな休憩所もあった。

白妙ペンギンはマガモの生態が書かれた、木を模した公園独特の看板を見つけた。が、看板には、

「マガモ ただのカモ」

としか書かれていない。

「真鴨……まあ、確かに、まことのカモ、だけどさ」

もうちょっとなんか書かれてもいいんじゃないかしら、と白妙ペンギンは憤った。

「ねえ四季、マガモは何て言ってるの」

「マガモはぐあぐあ鳴く」

「そうじゃなくて、なんかよく分からないなんかがあるんでしょ。それ、教えてよ」

「あー……」

人間は、正直に答える事にした。

「あそこに茶色のマガモがいると思うんだけど」

白妙ペンギンは、人間が指差した方を見る。そこには確かに、茶色のマガモがいる。ぼんやりと水面に浮いており、時より思い出したかのようにつるりと水面を移動している。

「秋刀魚には慈悲を、お茄子には愛を」

「は？」

「あのマガモからはそう読める」

「意味が分からないんだけど？」

「だからそれがマガモ」

「……参考にならないわ。私にはそんなメッセージ、読み取れないし」

白妙ペンギンはうなだれた。数秒後、彼女は元通りになった。

「ま、正直期待はしてなかったしね。せっかくだし、あそこの休憩場で休みましょ。私、喉が乾いたし」

休憩場の自販機で、人間はサイダーを選んだ。ペットボトルの蓋を開けると、ぷしゅり、と炭酸飲料特有の音が鳴った。同時に、ふわりとサイダーの香りが広がる。

白妙ペンギンは缶のアイスコーヒーを選んだ。プルタブを捻り、一口飲む。コーヒーは苦く、そして甘かった。

……平和だ。人間と白妙ペンギンは、同じ事を考えた。宇宙怪獣も、科学者の超兵器部隊との戦いの最前線から遠く離れた東京の地。特に新宿御苑は日本の情勢と無関係に、時間の流れは緩やかで、都心とは思えない程自然に溢れている。自動車の音も、ここまでは届かない。届いたとしても、それがまた平和さを何故か強調してしまう。

「なんでだろうね」

白妙ペンギンはつぶやいた。

「南極帝国の超兵器部隊だって、航空機があるはずよ。東京に直接的に攻撃しても良いはずなのに、何故か九州で攻防戦を繰り返している。宇宙怪獣は時より来るけど、それも偵察程度で小

規模……何が目的なのか、さっぱりだわ」

「……」

「どっちも、普通に暮らす普通の人達を脅かす脅威なのは違いない。私は、そんな奴らを倒して、みんなが安心して暮らせる世界になって欲しいとおもってるわ……司令には青臭いって、言われたけどね」

「白妙の考えは立派」

「ありがと。四季はどうなの？ 何故戦うの？」

「……私には白妙程の戦う理由はない。白妙が戦うなら、私も戦う。前にも言ったけど、私は、白妙が重症になったり、死んでしまうくらいなら、戦って白妙を守りたい」

「……なんで？ なんでそこまでしてくれるの？」

「友達だから」

「それだけ？」

「そう」

「単純だわ。いくらなんでも命を張る程のものとは思えないけど……」

白妙ペンギンは戸惑った。この盲信に近い人間の心とはなんなのだろうか。

恋？ いや、人間はそのようなものには興味がない。そもそもお互い、同性愛者でもない。

「マガモね。私には、四季のそれ、分からないわ」

「分からなくてもいい」

「そう言うと思ってた」

白妙ペンギンはにひっと笑った。それは、人間に対する、根拠なき信頼の証であった。

40……50……60……。

白妙ペンギンは、スーツを装着していた。新しく開発されたダイバーモードのテストである。ダイバーモードは水中で活動する事を想定したモードであった。これを使う事で、水中からくる宇宙怪獣を迎撃する事も可能となるはずであった。

白妙ペンギンの頭の中では、深度が忙しくなく数値を変化させている。スーツを装着した人間は、イメージの中で色々なものを確認したり、操作する事が出来る。ダイバーモードなら深度や酸素の残量が分かる。アーマードモードなら装備の発射指示を各武装に行う事が出来る。これらは五感で感じるものではなく、脳が直接その情報を認識/操作する事が出来る優れものである。手足を動かすのに操作ボタンが必要ないのと同じように、スーツの装備は体の延長線として使えるのだ。

白妙ペンギンは、右に移動したり、左に移動したりしながら、背中のフロートの動作を一つ一つ確認していた。

「どう？ 問題なさそ？」

軽めな口調の女性が、通信機越しに尋ねてくる。

「フロートに頼るとすぐエネルギーがなくなりそうね。かといって手足を使って泳いでもそんなに運動性は上がらなさそう……これで宇宙怪獣は倒せそうにはないわ。相手がよっぽど鈍足であ

れば別だけど」

「そーかー。背面フロート、いいアイデアだと思ったんだけどねえ」

大げさなため息が聞こえる。白妙ペンギンは少しばかりうんざりした。白妙ペンギンは彼女が苦手である。

「ねえ、ラキ。開発するのはいいけどさ、八割が失敗作なのってやばくない？」

「ペンちゃん違うよ、間違ってるよ。失敗しないと成功は得られないんだよ！」

「そうかもしれないけど。スーツだって私と四季以外使えないじゃない。五号機が使える人も見つからないし。誰にでも使えるように出来ないの？」

「そんな言われてもなー。スーツが桁外れに強いのは、相性のいい人が使ってこそなんだよね。相性悪いとそもそも性能を引き出す前に変身すら出来ないようになってるし、変身出来たとしてもまともに戦えないし。ペンちゃんだってレッドスーツを装備した瞬間に倒れちゃったでしょ？そういうものなんだよ、スーツって」

「そういうのを取り払うのが開発部の仕事じゃないの」

「やってますよ、やってるんですよ。ふーんだ、ペンちゃんは私の苦勞を知らないからそんな事言えるんだわ」

「知りたくもないわ。ホワイトスーツ・ダイバーモード、戻ります」

「冷たいんだからー」

スーツは常日頃から改良が行われていた。その改良を行う部門を、組織内では開発部と呼んでいる。

開発部と銘打ってはいるものの、人員は一人である。彼女の名前は何故か秘密である。通称はラキ。彼女の吸う煙草の銘柄ラッキーストライクを省略したものである。かつ、たまに大当たりな何かを発明する本物のラッキーストライクな能力を有している。

白妙ペンギンは、実験施設である学校のプールから顔を出した。空は青く、陽光がプールの外にある木々を輝かせている。初夏特有の美しい光景が、白妙ペンギンを落ち着かせた。このプールは一般のものとは違い、かなり深度があった。最下部まで行くと、そこは光がまばらな真っ暗な空間なのである。

白妙ペンギンは安心を感じていた。暗く視野の不明瞭な水中から、光多き外に戻ってこれるというのは、人に安心感をもたらすものであった。

「四季ちゃん、ペンちゃんの調子ってどうだった？」

開発室の一室で、人間とラキはダイバーモードのデータを処理していた。コンピュータはデータが受信されるごとにめまぐるしくグラフを変化させている。ダイバーモード自身の情報から、白妙ペンギンの感情までもが映し出されている。

「若干の不安……それ以外は特に問題なしといった感じです」

「だよなー。ペンちゃんの適性試験も兼ねてたけど、やっぱり彼女こそホワイトスーツの使い手だよ」

ラキはコンピュータにデータを入力しながら、画面から目を話さずに答えた。ラキは司令と似たような年齢の、短髪の女である。性格は明るく、声ははっきりしており、言動は軽い。人間にはそのような人間に見えた。しかし、ラキから何かを読み取れる事はなかった。マガモでも、よくわからない何かを読めるが、ラキからは全く何も読めなかった。表面的なものとは違い、慎重な性格なのではないか、と人間は予測していた。

「わざわざ付き合わせて悪いね。開発部は人手が足りないもんだから」

「いえ」

「ダイバー、四季ちゃんも使う？ 使ってみちゃう？」

「いえ」

「釣れないなあ。ペンちゃんも中々手厳しいし、最近の子はクールね」

「ラキが明るすぎるのよ」

部屋の扉が開いて、白妙ペンギンが入ってくる。そこには不満の顔があった。

「ペンちゃんありがとー、良いデータがとれたよん」

「そ、良かったわ」

そっけないなあ、とラキは嘆いた。

「で、ダイバーはどうするの」

「しばらくは開発を続けるよ。水中戦は必要だってわかばちゃ……えへん、司令は言ってるしね。それよりも……」

ラキは人間を見た。その顔はおもちゃを見つけた子供の様であった。

「四季ちゃんならビッグ・ザ・ビッグを扱えると思うのよ。どう？ どう？ 次の戦闘で使ってみない？」

「四季、ラキの言う事なんて聞かなくてもいいわよ」

「四季ちゃんなら絶対使えると思うわけよ！ お母上も時々使ってたやつなんだから」

「……対大型物体および拠点破壊用武装」

「そうそれ！」

「……必要になってから使いましょうよ。使いたいから使うって事ばっかやるからラキはよくないわ」

むう、とラキは唸った。

人間はラキの兵器を試したい欲望は理解出来なかった。それは白妙ペンギンも同様であった。

「私、汗かいたからシャワー浴びてくるわ。四季、後で地上に戻って何か甘い物でも食べましょ」

「……ねえ四季、私は甘い物が食べたい、そう言ったわよね」

「そうね」

「ここはどこ？」

人間は周囲を確認した。

壁には臍物類をカタカナで書いた紙が適当に貼られている。その紙は煙でいぶされ、焦げたよう

に色あせていた。

その紙の真下には家族がいる。父親と、母親と、二人の男の子が、楽しそうに鉄板を囲み、肉や野菜を焼いていた。

「焼肉屋」

「四季は焼肉が甘いと。そう言いたいのか」

白妙ペンギンは不満を表していた。彼女はティラミスが食べたかった。

ざらりとした苦い、薬のような粉末に乾く口の中を、まろやかに甘くコクのあるクリームチーズで中和される、あのえも言われぬ快感。それこそが白妙ペンギンを今日まで動かしてきた。ふわりと漂うカカオの香りが、疲れを癒し、活力を生み出していた。白妙ペンギンにとってティラミスは一日の締めくくりであり、明日を駆け抜けるための燃料でもあった。

ここはカフェでもなければケーキ屋でもない。煙と、鉄板と、飲み屋にも劣らぬ喧騒しかない野蛮な店である。肉や臓物をただ焼くだけの原始的な店である。食べ物は五感で味わうものだと白妙ペンギンは主張した。味覚を主とし、嗅覚で香りを楽しみ、視覚で彩りを慈しみ、フォークで刺す触覚を感じ取り、食べ物に合った音楽で聴覚を満たす。それこそが食事ではないのか。最高の空間で最高に美味しいティラミスを食べる事こそ人類究極の至高ではないのか。

白妙ペンギンは憤った。机を盛大に叩いて人間に抗議した。ここにティラミスはない。何故だ！

「甘い物なら、メニューにアイスがある」

アイス……白妙ペンギンはそこで気持ちが萎えた。間違いなくアイスは甘いものである。また、ティラミスを食べに行こうと言ったわけでもない。"甘いもの"を食べに行こう、そう白妙ペンギンは言った。人間は何も間違っていなかった。そして、全てが間違っていた。ティラミスとアイスでは、比較にもならない差があった。

「そうじゃなくて……もう、いいわよ、分かったわよ。でもこれは四季のおごりよ！」

タン塩と豚バラ盛りとごはん、豚バラは塩で！ と白妙ペンギンは店員に怒鳴った。

人間は、そこに骨付きカルビを追加した。

この時、人間は、白妙ペンギンを確認していた。

人間と白妙ペンギンは、タン塩と骨付きカルビを焼いていた。……これが、宇宙怪獣に殺された人と、何が違うのだろうか。人間は、目の前にある生肉と、人の肉を比較した。肉という点では同じである。死体という点では同じである。骨つきカルビに至っては骨もある。白妙ペンギンは、人が解体された死体は恐れるが、牛が解体された死体はどうとも思わない。食材の一種、程度にしか考えていないという事が読み取れる。それは宇宙怪獣の考え方と同じである。

人間は、もし自分が肉になってしまったらどうなるのだろうかと考えた。

味は部位によってばらつきがあるだろう。そもそも部位単位でも味が違うかもしれない。牛ならば栄養管理などがなされ、品質が保証されているだろう。しかし、人間にはそのような管理はなされていない。故に、味や質は保証出来ないであろう。少なくとも人間を食べるよりは、牛を食べた方が美味しいし、量があるし、質はいい。望んで人を食うというのは、何故だろうか。旅行をしてまで食べる程美味しいものなのだろうか、宇宙怪獣にとっての人というものは。

白妙ペンギンはタン塩を食べている。人間は、白妙ペンギンが肉になる所を想像しようとして、首筋に氷を当てられたような戦慄を覚えた。

そのような行為は見過ごせない。そんな事をする奴は許せない。東京の人間が全て食われたとしても……全てには人間も入る……白妙ペンギンが食われるのは駄目だ。

「四季？ どうしたの」

白妙ペンギンは不思議そうな顔をしていた。

「珍しいわね、表情を変えるなんて」

人間は、自分の頬に手をあてた。私は一体どんな顔をしていたのだろうか、と手の感触から推論しようとした。しかし、すでにいつもの無表情に変わっていた事に、人間は気づかなかった。

「ねえ四季。私ってどうなるのかな。やっぱり、スーツに乗るのは諦めろって、言われるのかしら。もちろん、私は、乗り続けたいのだけど」

焼肉屋は賑わっていた。家族の談笑、酔っ払いの馬鹿騒ぎ、女二人の恋愛話。この中に白妙ペンギンのやるせなさが分かる者がいるのだろうか。能力はある。しかし、活かさない。それは白妙ペンギン個人の責任なのだろうか。白妙ペンギンの性格による不備をどうにかするには、白妙ペンギンが人の肉塊に慣れる事しかない。……本当にそうだろうか。それ以外の方法はないのか。個人の負の性質を、単純に個人の責とするのは簡単だ。個人の素質を上手くコントロールし、活かしてこそ、人が二人以上で行動する意義があるのではないか。人間と白妙ペンギンは組織の花形だと司令は言う。花形が花形である為には、多くの裏方の支援があってこそのはずだ。

人間はひっかかるものがあった。今はまだ、それを言葉にするだけ考えがまとまっていなかった。

人間は恐怖というものに理解がなかった。そういうものがあるという存在は知っているものの、感覚として、恐怖というものを体験した事がなかった。人間はだからこそ宇宙怪獣を打倒しえた。常人が宇宙怪獣に食われるのは、宇宙怪獣の体が強靱だからではない。また、宇宙怪獣を倒せるのは、スーツの力があってこそでもあるが、いくら力があっても、それは心持ちが整っていないければ無意味なのである。人の心の内から出る生理的な恐怖が、人を縛り、宇宙怪獣を優位にするのだ。その恐怖という感情がなければ、スーツなしでも常人は宇宙怪獣に立ち向かえる。もちろん、武器は必要ではあるが。

人間はその日、早めに地下へ降りた。校舎裏にあるプールの更衣室を開けると、そこにはラキがいた。ラキはここでダイバーモードの調整と実験を行っているのである。

「あ、四季ちゃんやっほー。ペンちゃんと一緒にじゃないんだね」

「白妙は今日は用事があるとか。ファンクラブ、がどうとか……」

「あれ、ペンちゃんってそういう趣味があるの？ アイドルのおっかけみたいなの」

「さあ」

人間は人間のファンクラブの事を知らない。

「……一つ相談が」

「あら、なにになに？ お姉さんにどーんと任せて全てを打ち明けちゃってよ、恋愛？ 恋愛？ 男

なの？」

「いや……女」

「おお……四季ちゃんったらそんな禁断の愛を……！」

「恋愛とは関係ないです」

「あらん」

「白妙についてです」

人間は、白妙ペンギンの恐怖について話した。人間が、恐怖というものを理解出来ない事も話した。

「私は……どうすればいいのでしょうか」

「うーん、私はただのスーツ開発者だからねえ。人の心の闇を晴らす仕事なんぞはやってないんだよね」

ラキは煙草に火をつけた。数回煙草の先を赤くした後、人間の顔を見て「あっ」と声を出した。

「ごめんごめん、適当な事を言い過ぎたね」

その声はなだめるようであった。人間は顔を触った。何か変な顔をしていたのだろうか。表情を変えたつもりはなかったのだが……。

「そうね、例えば、こんなのはどうよ。ホワイトスーツの視覚情報を改ざんして、人が飛び散ってるのを見えなくさせるとかさ。ペンちゃんはそういうグロが苦手なわけでしょ？ なら見なければいいんだ。スーツごしに物を見る時は視覚に制限を設ければいい。どうかな」

「それは簡単に出来るものですか」

「もちろん簡単にはいかんね。視覚制御周りは伝達に遅延があると致命的だからねえ。でもまあ、やるしかないでしょ。ペンちゃん思いな四季ちゃんにお姉さんは報いたいわけです」

えへん、とラキは胸を張った。

「どーんと任せなさい、どーんと！ ……でもまあ、時間はかかるから、気長に待ってね。後、司令にもそういう対策を取る事を伝えておくよ。多分、これでペンちゃんが降ろされる事はなくなるよ」

「ありがとうございます」

人間は体が軽くなるのを感じた。無意識に緊張させていた肩を降ろし、強張らせた足から力を抜く。

良かった。これで白妙が望むようになる。

人間は、この時初めて、安堵という感情を覚えた。心に張り付いた重荷が減り、普段の平静な心持ちになるのが分かる。

ラキは煙草を吸い終わると、とても満足そうな顔をしていた。

「今日の四季ちゃんは魅力的ね。良いもの見ちゃったし、これは頑張るしかないわね」

やるぞー！ とラキは気合を入れた。

人間は、魅力的という言葉の意味が理解出来ず、しばしの間カラを数えた。

後日、ラキは人間と白妙ペンギンにホワイトスーツの追加機能について説明を行った。

ホワイトスーツには視覚的に制限が設けられ、人の四散した姿を認識出来ないようになった。

「でもあくまで実験的機能だから、本当に役に立つかは、実戦で試してみないと分からないね」
それに……とラキは、躊躇いながら言葉を追加する。

「視覚情報の改ざんが脳に伝える影響も未知数なんだ。スーツの操作系は、脳に直接影響を与えるから、今回の改修で何が起こるかは、予想出来ないんだ。多分問題はないし、何かしらの問題が起こったらレッドスーツ側から機能を停止するように作ってある。……機能を切ると、生の視覚情報が流れてくるだろうから、そこは気をつけて」

白妙ペンギンは唾を飲んだ。そこには緊張と戸惑いと、そして嬉しさが入り混じっていた。リスクはあるが、それでもちゃんと戦える。これで私もちゃんとやれる。機能がおかしくなったらそれまでだが、それまでに強くなっていればいいんだ。四季もいるし、これで安心だ。

白妙ペンギンの内外が一致した事に、人間は安堵した。